

り罷り出で、緋の纒を額に著、赤き幡袴を擎げて、馬に乗りて、阿倍山田の前の道と豊浦寺の前の路とより走り行き、輕諸越の衢に至り、叫喚び請へて言さく「天に鳴る雷神、天皇請へ呼び奉る」とまうす。然うして此より馬を還して走りて言さく「雷神なりといふとも何故か天皇の請を聞かざらむや」とまうす。走り還る時に、豊浦寺と飯岡との間に鳴る雷落ちて在り。栖輕見えずなはち神司を呼び、輦籠に入れて持ちて大宮に向る。天皇に奏して言さく「雷神を請へ奉る」とまうす。時に雷光を放ち明り炫く。天皇見たまひて恐りて俤しく幣帛を進りたまひ、落ちたる処に返さしめたまふ。其の落ちたる処は、今に雷崗と呼ぶ。古京の小治田宮の北に在り。然うして後の時に栖輕卒ぬ天皇勅して留めたまひ、七日七夜彼の忠信を詠はしめたまふ。雷の落ちたる同じき処に彼の墓を作りて収め、碑文の柱を立てて言はく「雷を取りし栖輕の墓」とのたまふ。雷の患み怨みて鳴り落ち、碑文の柱を踏踏む。彼の柱の折けたる間に雷落ちて捕らる。天皇聞きて雷を放ちたまへども死なず。雷降れて七日七夜降りて在り。天皇の勅碑文の柱を樹てて言はく「生きても死にても雷を取りし栖輕の墓」とのたまふ。謂はゆる古京の時に名けて雷崗と為ふ語の是れなり。

狐を妻として子を生ましむる縁 第二

昔欽明天皇是れ磯城嶋金刺宮に國食しし天皇天國押開広庭命なりの御世に、三乃國大乃郡の人、好き嬢を妻覓せむとして路に乗りて行く。時に曠き野の中に妹き女に遇ふ。其の女壯に媚び馴く。壯睨ちて言はく「何すれぞ行く雅き嬢」といふ。嬢答へていはく「能き壯を覓がむとして行く女なり」といふ。壮また語りて言はく「我が妻と成らむや」といふ。女答へて言はく「聴さむ」といふ。すなはち家に將て、交通ぎて相住む。比頃懐任みて一の男子を生む。時に其の家も十二月の十五日に子を生まむ。彼の犬の子、家室に向ふごとに期剋ひ睨皆み嗥吠ゆ。家室齋え惶り、家長に告げて言はく「此の犬を打ち殺せ」といふ。患へ告ぐといへどもなほ殺さず。二月三月の頃に、年米を設けて春く。時に其の家室、稻舂女等に間食を充てむとして確屋に入る。すなはち彼の犬の子、家室を咋はむとして追ひ吠ゆ。すなはち驚き諱き恐ぢ、野干に成り、籬の上に登りて居る。家長見て言はく「汝と我れとの中に子を相生むが故に、吾れは汝を忘れじ。毎に來りて相寐よ」といふ。故に夫の語に隨ひて來て寐き。故に名

第一縁「王と愛欲」のイメージを含む物語が冒頭に置かれるのは、より古い段階の物語的伝承が王と神との結婚のイメージを含む冒頭部を有していた伝統のつとっているのであろう。源平盛衰記十七に書承(三)寛文版日本書紀神代十七に書承(コレソノコト)モノナリ。説話の標題を「縁」とする例は撰集百縁経、衆經要集金藏論、など。三小部連傳(蟬の表記は蟬の住人としての設定。蟬は蟬蛻古注では桑虫を我が子とする毛詩、小雅・小宛。日本書紀、新撰姓氏録、に、雷や養蚕に関わる説話を載せる。「力」のすぐれた人とされた。三奈良県桜井市に所在。四古事記下では多くの求婚説話の主人公。五肺のどとき重要な侍者。六肺二肺は同義。七下音普及か、訓伊は、別の内職と誤解。八奈良県桜井市に所在か。九内裏の正殿。天武朝以降に存在が確認される。十底本訓釈「麻(禰天)二婚合上音古隠反、久奈可比、二合」。十一底本訓釈「櫻(也見反)」。十二その時に。十三原文奉請は、神仏など尊貴な者を迎える意の仏典語。たとえれば法事讃にみえる。

一底本訓釈「緋(安介)二機(可川良)」。機は紐状の頭部裝飾。二幡。三底本訓釈「聖左(介天)」。四わゆる山田道。阿倍山田ともに寺名。五推古天皇元年(五五)。六等由良寺(元興寺伽藍縁起)。山田、阿倍、豊浦、のいづれも雄略天皇のころにはまだ存在しなかったとはいへられたものでない。六地名。七雷は異界との接点と考えられたためである。八神皇天に改葬された塩媛のための誄も「野樹

(五五)で奏されている(書紀・推古天皇二十年二月条)。底本訓釈「雷(知万太)」。七雷を神として遇しつつ天皇より下位とする。書紀・推古天皇二十六年条では雷の地位は更に低下。「所在不明。八延喜式・神祇一に鳴雷神祭の祭料として(籠籠(コソコ)」。底本訓釈「棄去」と。二底本訓釈「枝(可)也(介利)」。二十分に。三底本訓釈「儀(大)波(口)」。三神へのさげもの。底本訓釈「幣帛(上音聲反、下音百反、二合、弥天久良)」。三書紀・雄略天皇七年条では蜺(蜺)が小部雷という名を賜ったとされる。ここでは地名起源説話。四奈良県高市郡明日香村に所在。五奈良県高市郡明日香村に所在。六凡墓、皆立碑、記具官姓名之墓(喪葬令)。七この雷には足がある。底本訓釈「踊(久患)」。新撰字鏡にも「雷乃不女留木」とある。八太平記・三九三・狄仁傑、三九四・葉遷詔に類話。笑いをめざした説話構成。底本訓釈「操(波左万利天)」。この表記を「捉(取)捕と変化させている。九底本訓釈「慌(保礼天)」。十底本訓釈「樹(立也)」。十一「生きても死んでも」というイメージは、中巻一縁、下巻一縁にも結びついている。三上文より推せば、小治田宮の時。三「本縁」コトノモト(色葉字類抄)。起源説話。

第二縁「異類よりの始祖の誕生のイメージを含む説話が第二話に置かれるのは、より古い段階の物語的伝承が王と神との結婚に続いて神の子としての始祖の誕生を述べていた伝統のつとっているためであらう。

けて支都禰と爲ふなり。時に彼の妻紅の欄染の裳を著て今の桃花裳なり。窈窕び、裳を欄引きて返ぬ。夫去ぬる容を視て、恋ひ歌ひて曰はく「こひはみなわがうへにおちぬたまかざるはろかにみえていにしこゆゑに」といふ。故に其の相生ましむる子を、名けて岐都禰と号ふ。また其の子の姓、狐直を負ふなり。是の人強き力多有り。走ること疾くして鳥の飛ぶが如し。三乃国の狐直等の根本是れなり。

雷の意を得て子を生ましめ強き力在る縁 第三

昔敏達天皇是れ警余詠語田宮に國食しし淳名倉太玉敷命の御世に、尾張國阿育知郡片絶里に、一の農夫有り。田を作り水を引く時に少細に雨降る。故に木の本に隠れ、金杖を操きて立つ。時に雷鳴る。すなはち恐り驚き、金杖を撃げて立つ。すなはち雷彼の人の前に墮つ。雷小子に成りて随ひ伏す。其の人金杖を持ちて撞かむとする時に、雷言はく「我れを害すことなかれ。我れ汝の恩を報いむ」といふ。其の人間ひて言はく「汝何に報いむ」といふ。雷答へて言はく「汝に寄りて子を胎ましめて報いむ。故に我が爲に楠の船を作りて水を入れ、竹の葉を泛べて賜へ」といふ。すなはち雷の言の如く作り備へて与ふ。

時に雷言はく「近く依ることなかれ」といひて遠く避けしむ。すなはち震り霧ひて天に登る。然らして後に産る児の頭に蛇を纏ふこと二遍、首と尾とを後に垂れて生る。長大り年十有餘の頃に、朝廷に力人有りと聞きて、試むと念ひて、大宮の辺に來りて居る。爾の時に王有して力秀れたり。當時大宮の東北の角の別院に住みたまふ。彼の東北の角に方八尺の石有り。其の力王住処より出でたまひて其の石を取りて投げたまふ。すなはち住処に入りて門を閉ぢたまひ、他人を出で入らしめず。小子視て念はく「名と聞とある力人は是れなり」とおもふ。夜人に見られずして其の石を取りて投げ、一尺益る。力王見たまひて、手を拍ちて攢み、石を取りて投げたまふ。常より投げ益ること得ず。小子また二尺投げ益る。王見て、また投げむと希ひたまひて、なほ益ること得ず。小子の立ちて石を投げたる処に、小子の跡深三寸に踐み入る。其の石また三尺投げ益る。王跡を見て念ひたまはく「是に居る小子の石を投げたるなりけり」とおもひたまひて、捉らむとして依りたまふ。すなはち小子逃ぐ。王小子を追ひたまふ。牆を通りて逃ぐ。王牆の上を蹠えて追ひたまふ。小子また返り、俄に逃げ走る。力王終に捉ること得ずして念ひたまはく「我れより力益る小子なり」とおもひたまひて、更に追ひたまはず。然らして後に小子元興寺の童子と

一 底本訓釈「食園(二合、久爾乎之)」。二 岐阜奥指斐郡大野町あたりに。三 「よきをみな」の表記を好嬢(二妹女)雅嬢(二変化)と変化させてゐる。底本訓釈「嬢(平見奈)」。毛妻とする女を求め尋ねる。先代旧事本紀・四「而覺(二妾)妻」。まぐはは求め尋ねる意で、結婚する意の「まぐ(二住心論)」。元云頭にて位置する「時」は、このとき、そのときに、の意。
二 底本訓釈「傾(傾か)古比」。三 底本訓釈「馴(奈川支)」。三 流し目に見る。底本訓釈「睡(米加利宇都、又云米見須)」。三 一よきをみな」に対する。雷、犬の子の誕生日を記し男子の記さないのは笑いをめざす。四 底本訓釈「家室(二合、伊乃乃止)」。五 國図書館本訓釈「家室(二合、伊乃乃止)」。六 未詳。七 期勉迫迫。八 典語。九 妙法蓮華經・譬喻品に「唯睡(二睡)は嚇(二嚇)み合(二合)とあるの転用。底本訓釈「睡(爾良率)骨(骨)如上、又云波爾加美、又云伊支(二美)二(二睡)吹(二合、保由)」。十 底本訓釈「魯(於比江)」。元云出挙(二)の利箱を奪いて精米し、京に送った。納期は四月三十日(延喜式・民部下)。元米は田租。十一 朝食夕食以外の食事。現代の昼食。十二 底本訓釈「僕(謀か)於地(二恐)の訓(置入か)」。十三 底本訓釈「犬と狐とが争うイメージは下巻二縁に結びついている。十四 底本訓釈「寐(禰支)」。底本訓釈では過去の助動詞「き」の終止形はここだけみえる。当時の用法では「き」の終止形は會話文中に用いられることが多く、地の文の中では少ない。説話の冒頭と末尾とに「き」を用いて中間には用いない、というのは古典の訓読文体。

一 「来て疎きだから」きつね」という。語源説話。本行から割注へと連続する形式は中国にも、また日本の上代にも類例がある(石塚晴通)。本書では、歌謡を記す箇所この形式がみられる。二 底本訓釈「須(須)」。狐の化した女が「袋」を着ていた例は紀聞所収の新守貞の説話(伝記、四五〇)や沈既済の任氏伝などにみえる。三 ものしずかにふるまう。底本訓釈「猖(上音要反、下音調反、二合、佐備)」。四 「いぬ」の表記を「返(去)と変化させている。五 去る者を偲ぶ。歌のイメージは中巻二縁に結びついている。万葉集・十一・三言、十二・三言に「朝影にわが身はなりぬたまかざるほのかに見えていにし子ゆゑに」とみえる。本説話の「はろか」は上文の「曠野」に対応する表現。六 ここでは人名起源説話となつてゐる。七 未詳。同名の一族が実在しないならば、この説話の興趣は激減する。八 狐が強力のイメージと結びつくのは珍しい。

第三縁 雷より授かつた子の説話。都良香の道場法師伝(本朝文粹十二)は本書に拠るか。道場法師の孫については、中巻四縁、中巻二十七縁、にみえる。
一 以下、底本訓釈「憂(我去(志)か)備)」。二 奈良県桜井市大字戒重あたりに所在。底本訓釈「沢(二合、平佐)」。三 底本訓釈「食園(二合、久爾乎敷)」。四 底本訓釈「淳(食沼)か(也)二(太)布止)。五 名古屋市中区。新村出によれば阿育知郡」という表記は阿育王の名より借用。底本訓釈「禰(和)」。二 禰」をよりよく根拠は不明。四 底本訓釈「農夫(二合、多都久留乎乃去)」。五 少量の雨の降る状態をあらわす。底本訓釈「少細(二合、古佐女)」。以下、五三頁へ続く